

## 自著紹介

『私塾の近代—越後・長善館と民の近代教育の原風景』東京大学出版会、2014年

池田雅則（兵庫県立大学）

本書は、近代日本において近世以来の私塾が果たした役割とその変化について、村落に生きた文化的・政治的指導者層という利用層に徹底的に寄り添いながら明らかにしたものである。

1872年「学制」発令後も、町村のリーダー層には新旧さまざまな学問の世界が広がっていた。19—20世紀転換期にかけては公立の中等学校よりもむしろ、かれらが通った各種学校、私塾や結社のほうが盛んであった。これら民間の教育組織がかれらに支えられた背景とその変化を明らかにすることで、国家・政府による教育制度が過剰に浸透する日本の学校教育制度の確立過程の一段階について解明した。

これまでの日本教育史の通史が前提としてきた歴史記述に対して本書が提起した論点は少なくないと思う。この場を借りていくつか紹介したい。通史が前提としてきた歴史記述とはすなわち、第一には、フォーマルな学校教育の拡大こそが教育の発展であるとみなす歴史記述である。第二には、それぞれの研究者が善とする政治理念によって過去の事実を価値づけていく歴史記述である。第三には、第一・第二の記述を裏づける西洋科学と対称的に近世以来の和漢学を保守的・封建的な存在とみなす学術観である。

30年来繰り返されている近代学校批判や比較教育社会史の叢書が明るみにしてきたように、前段の歴史記述はすでに相対化されつつある。しかし、厳密な史料論および通史のナラティブを裏づけるに足る豊富な史料に根ざしてきた日本教育史研究においては、オルタナティブな歴史記述の存在を「論証」し位置づけることは、海外を対象とする教育史以上に困難であったと感じる。歴史を超える可能性を秘めた個性的な人物を扱う思想研究の領域は別にして、先達の研究は、特に厳格な史料論の壁が立ちほだかり、論点は理解されても論証において疑問符がつけられることが少なくなかった印象がある。

本書は、日本教育史研究の厳密な史料論を損なわずともオルタナティブな歴史記述が可能であること、およびその歴史記述が例外的ではないことについて示そうとした。本書の試みが成功しているかどうかは読者に委ねるよりほかないが、わたし自身はかなりの程度論証できたものと自負している。

本書で示したオルタナティブな歴史記述とは次のとおりである。第一には、ノンフォーマルな教育を軸にした記述を貫き通したことである。そうすることで、近代移行期のリーダー層の大半が学んだ経験があるにも関わらず、これまでその実態がブラックボックスにされていたノンフォーマルな機会における学習歴や学習内容が明らかにされた。ノンフォーマルな教育にこだわる歴史記述は、奇をてらった例外的なものではない。当時の学習構造に私塾が確固たる地位を占めていたという論拠は当然なものとして、そのうえ、現代ではNPOやフリースクールなどの学校外の教育機会がこどもの学習権保障において重要な地位を占めているからである。ただし、オルタナティブな機会は現代の日本社会において消極的な必要性しか認められていないのが実情である。そうした実情の背景となっているフォーマルな学校を過大に重視する硬直的な教育文化が、なぜ、どのようにして生じたのか。これは教育史研究において問われるべき重大な論点である。本書には、アクティブな教育研究を考える上での基礎的学知を提供する意義があると考えている。

第二に、研究者側が有する価値論によって当時の教育の一部を切り取って序列づけるような歴史記述と時期区分をとらず、当時の教育構造をできるだけ忠実に再現することに努めた。本書では、学習歴の社会的評価とカリキュラム構造という二つの側面から当時の教育構造の再現を試み時期区分した。そのことで、日本国憲法体制の萌芽としての自由民権運動の理念が挫折した1880年代前半をもって時期区分の一大画期としてきた、従来の歴史記述とは異なった時期区分を示した。本書では青年期の学習歴形成の構造という観点から、その構造がノンフォーマルな機会中心のものからフォーマルな学校中心に移行した19—20世紀転換期に時期区分の画期を見いだした。また、人脈を活かした遊学支援を受けるため、受験勉強のため、立身の夢を表現するため、リーダーとしての心構えをえるため、サロンの場での交際に役立つ教養を身につけるため、人々が和漢学の塾に殺到していたことを明らかにした。和漢学はそのままで近代社会と結びつくカリキュラムであった。

第三に、あくまで日本教育史研究が求める史料論の水準を損なわないままに、第一級の史料を膨大に使用することを通して上記の知見を論証した。本書では、1830年代から1910年代まで存続した越後の私塾、長善館の史料を使用した。当該史料には約80年3代にわたる経営者の日記、門人帳、明治期の塾生の作文と評価の書き込みが数万枚も保存されてきた。この第一級の史料に巡り合えた幸運が本書の誕生を支えている。これまで断片的なエピソードとしてしか語りえなかったノンフォーマルな教育の歴史について一貫性と真実性を保ったまま語ることが可能になった。また無限の多様性に開かれている私塾について偏りなく集合的に把握するために、私塾の概要を知らせる府県発刊の統計書を1300冊ほど用いた。このことで、長善館とそれを支えた地域のリーダーたちの歴史が例外的なものではなく、一定程度の普遍性を有していたことを示すことができた。

本書の結論や発想、時期区分は、近代批判以降の日本史研究、とりわけ地域社会史研究に依拠している。教育もまた地域社会を構成するファクターのひとつであり、地域社会における政治経済の動態と深く連関しつつ展開してきた。本書は、そうした研究成果に学びながら教育史研究の歴史記述を日本史全体の流れの中に再定位したものである。

とはいうものの本書は、あくまでテーマの学としての教育学の再構築と高度化に資することを最大の目的とした。ゆえに、事実を解釈するために用いた「ノンフォーマルな教育」、「学習歴」や「カリキュラム」といった分析概念は教育学研究の成果から学び取ったものである。これは今を生きる自分自身を教育学者として位置づけたかったからであるし、教育史というポストが教育学部や教職課程の一部に位置づけられているという厳然とした現実を、そのままに受け止めなければならないと思ったからである。それゆえ、教育学特有の分析概念を前面に出した記述スタイルに違和感を示される読者もいるかもしれないが、筆者としては近代教育学批判以降の教育学で鍛えられてきた分析概念を用いたつもりである。可能な限り抵抗なく読み進めていただけるように仕上げたつもりである。もちろん、分析概念の設定によって見えなくなった問題もあろうし、内容の根幹を成す論証面にほころびがみられるかもしれない。そうした批評を正面から受け止めながら、さらなる研究の深化に努めたいと思う。

なお本書は、筆者が2011年3月に東京大学より博士（教育学）の学位を授与された学位論文に加筆修正を加えたものである。また本書の刊行にあたっては、日本学術振興会研究成果公開促進費（学術図書）より助成を受けた。

最後に、研究会への出席もままならない幽霊会員に自著紹介の機会を与えて下さった世話人のみなさまに深く御礼を申し上げます。